

厳粛なる決断

【いつしか教え子たちは自分を越えてゆく】

久しぶりに地元に戻った。

時々校長室の窓がトントンとたたかれるので、出てみると教え子である。かつての教え子何人かが親となり、学校に来る。その帰りに校長室の窓をたたくのだ。

姉は直接授業を教えたわけではないが、私の担任した学年にいた子だ。その妹を私は担任した。ある日姉が神妙な顔をして私に話してくれた。

妹は、結婚をして子どもができたという。しかし、妊娠と同じくして癌が発見されたのだ。今手術をすれば高い確率で助かるが、子どもを産んでから手当をすると、母親が生きる確率は半分ほどになってしまう、という話である。そして、最後に姉は私にこう言って帰って行った。

「先生。妹が会いたがっている。時間があったらお見舞いに行ってください」

私の心はしばらくの間、鉛を詰めたかのように重かった。何をしても気になって仕方がなかった。しかし、結局私は見舞いに行かなかった。忙しくて、というのは口実で、行けなかった。彼女と何を話せばいいのか分からなかった。私にはただ祈ることしかできなかった。

何ヶ月か後、子どもは無事生まれ、彼女への手術も成功したという話を姉から聞いた。ホッとした。よかったと思った。本当によかったと思った。

それから、半年ほどして私は彼女と話をすることができた。彼女が私に会いに来てくれたのだ。私はずっと気になっていたことを彼女に聞いてみた。「お前、あの時どうして子どもを産むことを決意したんだ。私だったら、決断することがあまりに重すぎて、逃げ出してしまうかもしれない」

彼女の答えは意外なものだった。

「だって、先生は中学校の時私たちに『自分のことは最後は自分で決めろ』って、いつも言っていたじゃないですか。だから私も、自分で考えて最後は自分で決めました」

きっぱりと彼女は言った。

自分の命を選ぶのか、子どもの命を選ぶのか、人生においてこれほど重大な選択はない。その人生を決めるとでも言うべき重い決断の時、この子は私が担任をしていた20年も前の話を覚えていたのである。

私はといえば、そんなことを言ったのかどうかさえ覚えていない。言ったとしても、こんな重大な場面を想定してはいないことだけは確かだ。無責任でいい加減な担任の話を、この子はちゃんと覚えていたのだ。

そして、彼女なりの決断をした。何人も立ち入ることのできない、厳粛な決断であった。

今さらながら、ではあるが私は教師という仕事の深さに畏れるのである。私の言葉を思い出さなくても彼女はきちんとした決断をしただろう。そういう子である。しかし、私が発した私の言葉は、私の思い以上のものとなって彼女の中に息づいていたのである。そして、間違いなく彼女の厳粛な決断の背中を押した。たぶんそれは、私が言った言葉が何であったかではなく、私と彼女たちが共に過ごした3年間で何であったのか、と言うことなのだろう。

私は、この子たちとの3年間でいろいろなことを学んだが、今もって教えてもらっているように思えた。

「子どもを寝かしつけるので帰ります」

立派になった母親の背中を送りながら、「からだを大事にしろよ」と私は呟いた。酒がことさらにうまい夜だった。